

シニシズムと現在

「〔……〕この世の秩序が死の掟に支配されている以上は、おそらく神にとって、人々が自分を信じてくれないほうがいいかもしれないんです。そしてあらかぎりの力で死と戦ったほうがいいんです、神が黙している天上の世界に目を向けたりしないで」

「なるほど」と、タルーはうなずいた。「いわれる意味はわかります。しかし、あなたの勝利はつねに一時的なものです。ただそれだけです」

リウーは暗い気持ちになったようであった。

「つねにね、それは知っています。それだからって、戦いをやめる理由にはなりません」

(カミュ 『ペスト』)

0. はじめに

「わたしたち¹はどこにいるのか？」本プレゼンではこの問いを意識の面から探っていきたい。シニシズムという意識を現在の潮流に関わるひとつの大きな要素とみなし、シニシズムというものはどのように蔓延しているのか、なぜそれが蔓延しているのか、それは何をもたらすのか、といったことを考察していこうと考えている。このレジュームが勉強会参加者の議論の土台になれば幸いである。

1. シニシズムとは何か

シニシズムとは何か、ということに問うにあたって、まずその歴史的変遷を眺めていこうと思う。そのことがこの意識を概観する一番いい方法だろう²。

1-1. キニシズム

シニシズムの語源は古代ギリシアのキュニユコス(犬儒)学派の教え、キニシズムである。キュニユコス学派の始祖ディオゲネスは俗世の富を軽蔑し、それを実際の行動にあらわして風呂桶の中に暮らし、自ら望んで必要最低限の暮らしに甘んじた。そこでアテネの人々はディオゲネスを「犬」と呼んだ。ディオゲネスは自ら肯定的にそれを名乗り、それがキュニユコス学派の名の由来になる。彼は一流の風刺家にして社会批判の人であり、痛烈なアイロニーと身体表現を武器にして諸権威の欺瞞を暴いていった。当時の学問の権威であったプラトンが「人間とは羽のない二本足の動物である」と定義し喝采を浴びていると、羽をむしり取って丸裸にしたニワトリをアカデメイアへ持

っていき、「これがプラトンの言う人間だ」と言い放つ(以後その定義には「平たい爪をした」という語句が付け加えられた)。あるいは、身体性の肯定のために市の広場で放尿やマスターベーションに及ぶ。プラトンがディオゲネスを「狂えるソクラテス」と評したことから分かるように、キニシズムとは観念的な知とは異なるひとつの知のあり方であり、言葉によって体系的な論理を組み立てるのではなく、自らの実存によって知を示す(ディオゲネスは書いたものを残さなかった)。そこには優位権力に対する軽蔑と哄笑、抵抗が含まれている。

キニシズムという語はディオゲネスに端を発するが、それはキュニコス学派を唯一の源流にしているわけではない。キニシズムとは肯定的な意味での不遜な意識であり、被抑圧者の優位権力者に対する武器であるからだ。たとえば、長く虐げられた不幸な歴史を持つユダヤ人たちはその歴史ゆえに抵抗の理念を持つ。彼・彼女らは既存の支配、権力の儂さを知っており、支配者に対して不遜な態度を取る。そうしたユダヤ人から輩出されたキニシズムの徒の一人にキリストがいる。彼は「ローマ人の支配に抵抗を宣言した数多くのメシア的な反対運動の指導者、宗教的なゲリラの一人にほかならなかった³」のである。彼に内在していたキニシズムはキリスト教に受け継がれ、
・
・
・
・
・
シニシズムのひとつの源流となる。

1.2. 支配者シニシズム

キニシズムとは被抑圧者の優位権力者に対する武器、不遜な意識である、と書いたが、支配者の側も独自の不遜な意識を有するようになる。それが「支配者シニシズム」である。

原初の攻撃的なキニシズムは、観念論に対する賤民の側からのアンチテーゼであった。一方、近代のシニシズムのほうは、イデオロギーや仮面としての自分自身の観念論に対するお偉方のアンチテーゼである。〔……〕優位権力は、そのシニシズムによって自分たちの秘密をいくらか明かし、半端な自己啓蒙をやってみせ、内輪の秘密をばらす。支配者のシニシズムは、寝返った不遜である。⁴

シニシズム、それは「キニカルな挑発に対する支配者と支配的文化の側からの応答⁵」である。キニシズムは支配者の建前、欺瞞を鋭敏なリアリティーによって突き崩そうとする。すると支配者は建前、欺瞞の仮面を一瞬上げてこう教え諭そうとする。「所詮世の中はそんなものだ」と。この妖しい現実主義がシニシズムである。シニシズムはその誕生(発明?)の瞬間から現実肯定的であり、支配者(優位権力)の立場を揺るがないものにしようとする。そして、それは先天的に分裂症を患ってもいる。なぜなら、シニカルな対応はキニカルな挑発に備わる真実を十分に見て取ったうえでの対応であり、それでも抑圧をやめようとしなないからだ。キニシズムの哄笑に対して、シニシズムは歪んだ笑み、嘲笑と冷笑を含む。

ユダヤ的なキニズムを受け継いだキリスト教がシニズムのひとつの源流になる
ということの理由もこのシニズムの分裂症的な特徴による⁶。キリスト教はそのキ
ニズムのゆえに勢力を拡大していき、ローマを苛立たせるようになる。始めの内、
ローマは残酷な暴力によってキリスト教徒を迫害するが、それが一向に成果を上げず、
むしろ逆に勢力が拡大するに及んで対応策を変更することになる。ひざまづくこと
によって自らの権力システムに組み込むことにしたのである。こうしてローマ国内の権
力はキリスト教化され、分裂症的な相貌を帯びるようになる。「権力は経験たり得な
い、この見地は支配者の夜の悪夢に出てくるのではなく、白昼の計算の中に現れる⁷」
からだ。そしてそのことによって、二重王国論⁸というシニカルな理論が生まれてく
る。ローマ帝国という既存の権力を維持するために。

1-3. 近代的から現代にかけてのシニズム

以上に簡略的、そして図式的にだがキニズムとシニズムをまとめてきた。キニズ
ムとは「下」から「上」に対する不遜な態度、意識であり、シニズムは「上」から
「下」に対する不遜な態度、意識である。ここではキニズムとシニズムはある種二
極分化されており階層化されている。しかし、近代になって両者の領域は曖昧になり、
溶解してくる。市民社会と啓蒙主義が両者を橋渡しするのだ。

市民社会とは「システムにとって「外的」なエレメントを一面では規律・訓練、他面
では交渉・代表によってシステムへと包摂する媒介的場⁹」である。ここでのシステ
ムとは権力システム、あるいは統治システムのことを指す。前近代において、主権者
(王)は客体(国民、市民など)を超越的な法、布告、条例を介して統治しようとしてい
たが、そうした統治技術は人口拡大、貨幣の過剰、農業生産の増加という循環から破
産し、より柔軟で繊細な統治技術へと移行する。法、布告、条例などといった超越的
な次元が規律、ノルムといった内在の次元に埋め込まれるのだ¹⁰。また、普通選挙権
が導入され、(時間的なずれがあるが)「人口」「社会」という概念が登場すること
によって労働者の「抵抗」が統治システムに組み込まれていく¹¹。こうしたことは支
配者と被支配者、「上」と「下」といった単純で図式的な概念の垣根を低くし、曖昧
化、複雑化させる。ひとつの統治システムに包摂されていくことによってかつての支
配者と被支配者が出会い、溶解していく。そして、そこで浮かび上がってくる主体は
啓蒙主義の成果である、半ば「未成年状態」から抜け出した人間である。

啓蒙された主体たちは自らの理性を武器に社会の改善を目指してさまざまな運動を
繰り広げ、(かつてのキニズムが持つ哄笑の伝統とは決別し、まじめくさった鬘を
かぶり、言わばブルジョア化したものではあるが)キニカルな批判精神が広がること
になる。が、そうした啓蒙の精神は挫折することになる。これにはさまざまな理由が
あり、錯綜しているように思われるが、本プレゼンではその細かい究明はせず¹²、こ
こではシニズムの意識がどのように変化したか、という面を見ていく。啓蒙の理想

が撤退していくなかで、キニカルな批判精神に取って代わるようにして分裂したシニズムが現れてくる。そのシニズムは啓蒙の洗礼を受けており、かつて支配者シニズムがキニズムの挑発に含まれる真実を十分に見て取っていたように、キニカルな批判精神に含まれている真実を十分に理解している。そして、啓蒙の理想を失った意識はやはりこう言い放つのだ。「けれど、世の中こんなものだ。飯を食うにはとにかく仕事をしなけりゃならん」と。

最終的に問題となるのは、啓蒙の持つ社会的あるいは実存的な限界である。生き残りのための様々な重圧と自己主張の願望とが、啓蒙されたはずの意識を打ちのめした。世の中に対し自分なりに疑いを抱こうとも、それと折り合いをつけ、最後にはその仕事に自らの手を染めるしかない、この重圧が啓蒙された意識を蝕むのである。¹³

この「啓蒙された虚偽意識、不幸な意識の近代版¹⁴」はもはや以前のように支配者(優位権力)に特有のものではない。市民社会という場ができることによって大量に生み出され、自らを正常だと思いこむ「大衆」の意識である。その「大衆」像はハイデッガーの使った「ひと」という概念と奇妙に重なるように思われる。「ひと」とは「特定の人ではなく、総計という意味ではないが、みなの人であり、世間」である。通常「われわれ」というように自らに「平均的」で「正常」な性質を付与している、実態のない漠とした、それでいてパラノイア的でさえある世界との関係、それが「ひと」だ。ハイデッガーが『存在と時間』を著したのが社会法の誕生したワイマール共和国の時代であったのも偶然ではなかったのかもしれない。

このように変化したシニズムであるが、支配者シニズムと同様、現状肯定的であること変わりはない。そして、それは現状肯定的であるだけでなく、過剰な興奮、熱狂、破壊衝動を生み出す可能性があるということをも後に述べようと思う。

2. 現在「わたしたち」を囲む状況 恐怖とシニズム

これまでシニズムの遍歴を簡略に辿ってきた。そこでシニズムというものの姿を概観してきたつもりだが、以下ではそうしたシニズムが現在どのように生産され、どのように変容してきているのか、ということを見ていきたい。

2-1. 市民社会の衰退

・フォーディズムからポストフォーディズムへ

近代的なシニズムが誕生するための大きな要因として市民社会を挙げておいた。ここにおいて支配者と被支配者は複雑な関係を取り結ぶ。「外的」な要素とみなされた

被支配者たちは規律権力や普通選挙の導入、「人口」、「社会」という概念の誕生によって統治システム内に組み込まれ、統治システムは(ケインズ主義的)福祉国家へと結実していく。それは「生産の効率化を進めながらも、それに伴う利潤の増大を労働者賃金に上乗せすることで経済的循環を作る¹⁵」フォードイズムと密接に関係していきながら発達していく。福祉国家が労働力の安定した再生産を担い、フォードイズムが安定した雇用、究極的には完全雇用を実現する。

しかし、後期近代、あるいは現代において、こうした統治システムは別の姿に変貌しているように思われる。市民社会が衰退してきているのだ。まずそれはフォードイズムからポストフォードイズムへ、という経済的な変化から現れてくる。「経済危機、恐慌がつねに、経済的レジームの変革を促したように、それと絡み合っている統治の危機も、統治の体制の変容を促していく¹⁶」のだ。60年代の広範な労働者の闘争や、生産性上昇率の鈍化、インフレ、財政赤字の増大、失業率の増加といった状況が、資本にフォードイズム、福祉国家に対する見直しを迫った。

フォードイズムにおいては工場から社会へと(ほとんど)一方的な関係が成立していた。フォードイズム体制においていわゆる「規模の経済」が成立したのも、こうした関係を背景にしてである(モノをつくれればだいたい売れるということ)。ところが現代において、「成熟した」市場は「有限」であり〔……〕、その商品吸収力は硬直的で飽和的である。したがって、市場吸収力を超えるものはすべて排除される必要があり、それが首尾よくなされるかどうかは資本にとって死活問題となる。そうすると企業は必然的に「ミニマリスト」たることを余儀なくされる。生産は過剰に量を増大せず、かつ生産性を上昇させるというかたちで構造化されねばならない¹⁷。

こうして資本においてフレキシビリティが特権的な地位を得るようになる。生産は市場の需要に直結し、「在庫ゼロ」を達成するために、共振しなければならない。そのため労働者には必然的に(自ら協働関係を組織、運営、管理するという意味で)アントレプレナー的なスキルが要求される。労働者は「量」が削減されるのに反比例するようにして「質」の高さが求められるのだ。

このようにフォードイズムからポストフォードイズムへと労働・生産体制が移行していくにつれて、統治体制も変化するよう迫られてくる。

〔……〕アントレプレナー的コンダクト行為の人工的で競争的なゲームがもっとも効果的にプレーできるようにするために、法的、制度的、文化的条件を構成するという問題になる。〔……〕経済自体を超えて合理的 - 経済的モデルを拡大すること、そしてそれを統治的活動を限界漬けると同時に合理化するための原理として一般化することが問題である。統治は市場競争の原理のためのそして一種の企業それ自体として作動しなければならない。¹⁸

福祉国家が<社会的なもの>を統治体制の機軸に据えたのに対し、これを<経済的なもの>へと変換させていこうという主張が強まる。こうした主義、主張をネオリベリズムという¹⁹。

ネオリベリズムの照準は<社会>に向けられていたのであり、<社会的なもの>の領域を形成した諸制度を解体し、古典的なイメージによって再編することであった。もちろんそのイメージとは市場である。そのために、あらゆる<社会的>実践—健康、保障、福祉など—も市場の論理によって再構築されねばならない。²⁰

近代以降「外的」なエレメントを統治システムの統治システム内に包摂していた市民社会は、こうして<経済的なもの>あるいは市場原理にとって変わられることになる。そして、このことは既に済んでしまったことではなく、経済のグローバル化と共に世界中で現在進行している事態なのである。小泉政権の掲げる「規制緩和」や「郵政民営化」、「構造改革」もまたこうしたネオリベリズムの表れなのだ。

・「抑圧」から「排除」へ

市民社会においては「人口」という主体をマクロに捉える概念が登場することによって、個々人は数字に還元可能なものとみなされ、「連続」するものとして考えられる。市民社会内の人々は、たとえならず者として「異常」とみなされた人間でも、<社会的>装置（学校や監獄など）を通して更正可能であり、「労働予備軍」として数えられるのだ。「異常」とされる人間たちは統治システム内に包摂され、「抑圧」されるが、外へと「排除」されることはない。市民社会における管理・統御メカニズムは「異常者」に規律、ノルムを内在化させることによって「正常者」へと更正しようとする「抑圧」である。

しかし、市民社会が衰退し、<社会的なもの>に<経済的なもの>が取って代わるようになると話は変わってくる。人々の間にもはや「連続」はなく、大きな「断絶」が生まれる。市民社会、福祉国家が衰退していくにつれ、社会保障(social security)、セーフティーネットもともに衰退し、ポストフォーディズム体制における労働者の篩い分けによって貧富の差は拡大、二極化する傾向にある。いわゆる、「勝ち組」と「負け組」が生まれるわけだ。ポストフォーディズム体制において、労働力の削減は死活問題なのだから、「負け組」あるいは「異常者」とされた人々はかつてのように「労働予備軍」とみなされることはない。彼らは労働力商品としてはムダであり、単なる「無用な人間」とされるのだ。彼らがシステムに包摂されるのは「勝ち組」には目障り、というか危険に感じられ、「勝ち組」は「社会の防衛」を名目として、「外」へと「負け組」を「排除」しようとする。そうすることによって「内」にユートピアを創設しようというのだ。そのために、監視と操作が市民社会では考えられなかったほど

の力を持つようになる。「犯罪者」は罪を犯す前から「排除」しようというのだ。社会保障は衰退し、管理支配のセキュリティ(軍事・警察力)が上昇する。

こうした市民社会の衰退は「わたしたち」の前であからさまに進んでいくのではない。権力の正当化が「メディアなどの情報装置が生成するシミュレーションの場によって調達され」、市民社会が喪失することによって現れる空白に「シミュラクルとしてのより高次の「市民社会」²¹」が居座るようになるのだ。「わたしたち」は消失しながら、なおシミュラクルとして存在するのである。

2-2. シニシズムの現在

近代以降のシニシズムを決定的に特徴付けていた市民社会が衰退していくなかで、一体シニシズムはどのような変化を見せているのだろうか？

先にも述べたように、ポストフォーディズムの社会ではフレキシビリティが特権的な地位を得る。そのために労働者は自らの確固としたアイデンティティを失い、言わば「根無し草」になる。

〔……〕ポストフォーディズムの社会では、フレキシビリティがしばしば残忍な相貌すら帯びる支配法則となる。資本と同様に労働者も、臨機応変に対応し、自らを順応させ、たえず好機をつかみとるように目配りを強いられるし、また、異質なグループ、価値のコミュニケーションをたえずおこない、ネットワークを維持拡大せねばならない。こんな状況においては、確固たるアイデンティティなどむしろ障害でしかない。²²

労働者はフレキシビリティを規制・促進するルール(それもまた柔軟に変更されたり入れ替えられたりするのだが)に従いながら、その都度"ゲーム"に(アイデンティティではなく)自己肯定の場を垣間見るだけだ。ゆえに、そうした「根無し草」の時間は断絶されており、刹那的である。しかし、もちろん彼・彼女は通時的に存在しているのであり、そのため意識的にしる無意識的にしるメタレベルの視点を持つことになる。このメタレベルの視点とその都度"ゲーム"で肯定される「自己」との間に乖離が起こるために、「根無し草」は分裂症的であり、シニカルだ。「根無し草」はつねに一步身を引いてことに当たる。彼らは笑うが、それは刹那的な笑いでしかなく、哄笑ではない。彼らは刹那的現在において自らの労働と戯れるしかない。彼らはその都度の繋がりを求めるだけだ。そしてまた、この新しいシニシズムもやはり(優位権力、「勝ち組」の側に立つという意味で)現状肯定的、保守的である。「フレキシビリティの賛美、そしてルールの尊重と軽視は、民主主義、あるいは「基本的人権」への嫌悪、軽蔑、あるいはあらゆる「建前」的なものへの侮蔑となってあらわれ²³」るからだ。「根無し草」はその根無し草性、分裂性のために「普遍性」や「平等」を「建前」とみなし軽蔑する。

ここで描きだそうとした新しいシニシズム観は北田暁大が指摘した²⁴「2ちゃんねらー」の姿につながるものがあるかもしれない。また、このシニシズムは近代から現代にかけて生み出されてきた先述のシニシズムに取って代わるのではなく、複合的に、そして相互に絡み合い影響し合いながら作用するのだと思う。

3. シニシズムと偽りの情熱

先に予告したように、シニシズムには現状肯定的であるだけでなく、過剰な興奮、熱狂、破壊衝動を生み出す可能性があると思われる。以下では簡単にではあるが、そうした面からシニシズムを考察してみたい。

まず、先にも挙げたキリスト教のシニシズムの事例を再び持ち出してみる。先にも述べたように、キリスト教はローマ帝国によって権力システムに組み込まれることによって、自らの元来のキニカルな教えと権力支配の武器に使われるということの間で分裂症的な葛藤が起きていた。P. スローターダイクはこの葛藤が暴力的で病的な「聖戦」を引き起こしたと言う。

「十字軍」という概念で総称される〔……〕一連の出来事は、キリスト教を奉じる封建領主たちが、自分たちの意識の支配者シニシズムに耐えられなくなり、それを外部に向けて発散させようとした試みである。〔……〕神聖な戦争を名乗るこの十字軍は、ファシズムの原型ともいべき性質の社会心理学的な爆発であった。個人や集団の心の中であって互いに打ち消しあう二つの倫理、そのあいだの葛藤で塞ぎ止められたエネルギーが、そこに捌け口を見いだしたのである。〔……〕集団的な妄想が公的に宣揚されることによって、愛の宗教と軍隊精神とのあいだの葛藤に悩む無数の個人は私的な発狂から守られる。²⁵

シニシズムが蔓延し、それに必然的に含まれる分裂と葛藤が個人の精神を破壊しかねないほど膨らむと、鬱屈したネガティブなエネルギーが「公的な宣揚」によって「外」へと暴力的なかたちで向かうことになる。ここで重要なのは、こうした運動に「公的な宣揚」が必要不可欠だということと、「外」は空間的な意味での「外」と完全に一致するのではなく、「われわれ」という集団的アイデンティティ(?)を基にして規定されるということだ(だから空間的には内に存在するユダヤ人がナチスによって虐殺されるという事態が起こる)。この二つのことは深く関係している。「外」に敵を作ることによって「われわれ」という漠とした意味内容が確固としたものになり(イスラム教徒に対するキリスト教徒、ユダヤ人に対するアーリア人)、またそのことによって「公的な宣揚」が効果的になる。「公的な宣揚」がおこなわれる以上、それによって生成される情熱は人為的なものである。そのことは個人の意識であるシニシズムというものが権力のシステム、暴力のシステムに組み込まれるということの意味する。個人は自らのシニシズムを偽りの情熱と交換することによって、葛藤から逃れることができるのである²⁶。

2001年の9.11の直後にブッシュ大統領が「自分たち」を十字軍になぞらえたのは興味深い。アラブ圏の猛反発を受け、さすがに十字軍という言葉は使わなくなったが、対象を「テロリスト」と変え、「われわれ（民主主義）の側につくかテロリストの側につくか」とメディアを通して迫った。一体だれに？ シミュラークルとしての「市民社会」、「わたしたち」にである。ブッシュに表象される統治権力は、かつて封建領主がしたように「公的な宣揚」をおこない、シニシズムを対価に偽りの情熱を売ったのではないだろうか。そして、事実アメリカ国内は異様な愛国主義的情熱に満たされた（ように見えた）のである。

4. さいごに

私は本プレゼンで、シニシズムについて善悪の判断をするつもりは毛頭ない。短絡的に行なう善悪判断が大きな危険性と暴力性を含むと思っているからだ。ただ、私の意志を述べさせてもらおうと、いかなる暴力にも抗していきたい。そして、シニシズムというものが大きな暴力を引き起こしていくものである以上シニシズムに対しても。しかし、一体どうやって？ それに関しては冒頭の『ペスト』の引用が私の考えを結構な程度あらわしていると思う。現代に生きる人間（もちろん私も含まれる）は多かれ少なかれシニシズムを有しているのであり、それを単純に「普遍性」や「平等」によって批判することはできない。むしろ私たちにできるのはシニシズムに対して別のシニシズムを持って対抗することではないだろうか。「つねにね、それは知っています。それだからって、戦いをやめる理由にはなりません」と。そうした新しいシニシズムを創造していくことが現在最も重要なのではないだろうか。

さいごに、このレジюмеがみんなの議論のたたき台になっていれば幸いである。

[参考文献]

- P. スローターダイク 『シニカル理性批判』（ミネルヴァ書房）
- 酒井隆史 『自由論』（青土社）
- カント 『啓蒙とは何か』（岩波文庫）
- 中山元 『フーコー入門』（ちくま新書）
- ジェフリー・C・ゴールド 『シニカル社会アメリカ』（ジャパンタイムス）
- マルティン・ハイデッガー 『存在と時間』（ちくま学芸文庫）
- 伊豫谷登士翁 『グローバリゼーションとは何か』（平凡社新書）

-
1. この「わたしたち」という言葉は一体誰を指しているのだろうか？ 講演会を行い聴衆を呼ぶ以上、もはや現代文学会員だけを指すのではないだろう。では当日に講演会場にいる人間を指すのか？ そこには新宿のホームレスの人たちは含まれな

いのか？小泉首相は含まれないのか？ビル・ゲイツは？……。このような問いに一義的に答えることはできないだろう。けれど、このような問いを発することが大事なのだと思う。自らの無自覚さに自覚的になることが。本プレゼンではハイデッガーの使った「ひと」という概念が「わたしたち」に当たるのかもしれない。「ひと」とは「特定の人ではなく、総計という意味ではないが、みなの人であり、世間である。」(マルティン・ハイデッガー『存在と時間・上』(ちくま学芸文庫) p277 より)

2. 以下は主にP・スローターダイク『シニカル理性批判』(ミネルヴァ書房)を参考にしている。
3. P・スローターダイク 前掲書 p.236
4. 同上 p.124
5. 同上 p.223
6. 歴史的真理ならびに「神」という強大な原理、権威と同盟を組んでいるゆえに潜在的にシニカルでもあるのだが。
7. 前掲書 p.239
8. 神の国と地上の国があり、それぞれは実質的にカトリック教会とローマ帝国とによって具現されているという説。
9. 酒井隆史 『自由論』 (青土社) p.33
10. 本橋・工藤プレゼン・レジュメを参考せよ。このことによって法は消失するのではなく、「いよいよノルムとして機能する」(同上p.221 より)のである。
11. 「社会法はひとつの観点からすれば、社会を和解不可能な諸勢力のコンフリクトの場として把握した上で、コンフリクトのその都度の収斂の場を設定するためのルールとして機能しているといえる。」(酒井隆史 前掲書 p.35 より)
12. この問題こそが今最も究明しなければならない問題なのかもしれないかもしれないが、ホストの力不足と紙片の問題からここでは避けようと思う。ただ、二つの点だけ指摘しておけば、啓蒙思想のひとつのあらわれとしてのソヴィエトの現前と崩壊、そして、アンチモダン思想としての「ポストモダン思想」の影響が大きな要因としてあるのだと思う。
13. P.スローターダイク 前掲書 p.20
14. 同上 p.222
15. 高橋プレゼン・レジュメを参考せよ
16. 酒井隆史 前掲書 p.93
17. 酒井隆史 前掲書 pp39□40
18. 同上 p.111
19. 古典的リベラリズムとネオリベラリズムとの大きな違いは、後者が市場というものを準自然的なものと はもはやみなしておらず、「統治〔政府〕によって積極的に構成されるべき特定の政治的・法的・制度的 条件のもとで存在する、あるいはそうした条件のもとでのみ存在できるもの(同上p.109)」とみなす点 にある。
20. 同上 p.107
21. 酒井隆史 前掲書 p.33

22. 酒井隆史 前掲書 p.48
23. 同上 p.50
24. 北田暁大 「笑う日本のナショナリズム」(『世界』2003年11月号) を参照せよ
25. P. スローターダイク 前掲書 pp241-242
26. 現在進められている「排除」もこうした文脈に位置付けることができるのではないだろうか。とするならば、「排除」の先に待っているのはとんでもない悲惨なのかもしれない。